

# 農林水産大臣賞受賞

みんなでワッショイ!! 住みよい石原

いしはら じちく  
受賞者 石原自治区

(広島県三次市)

## ■ 地域の沿革と概要

三次市<sup>きみたちょう</sup> 君田町は、広島県北東部、三次市の北側に位置する。人口 1,397 人、総面積 85.86 km<sup>2</sup>、標高約 200~330m の山岳地帯であり、君田温泉や君田ひまわり畑など、県内外から自然と癒しを求めて多くの観光客が訪れる。

気候は、日本海の影響を受け冷涼多雨で、冬期の積雪が 1m に達する年もある。水が集まる地域のため、秋から春にかけては川霧が発生・滞留し、高地から見ると、山がまるで海に浮かぶ島々のように見える「霧の海」が出現する。

人口減少と少子高齢化の中、君田地域まちづくりビジョンを策定し、基幹産業である農業において担い手を中心とした農業生産力の向上や農地保全の取組に力を入れることにより、新規就農者を確保し、移住・定住を進め、集落機能の維持・向上に取り組んでいる。

第 1 図 位置図



## ■ むらづくりの概要

### 1. 地区の特色

石原自治区は、総人口は 182 人、総世帯数 57 戸で、日南<sup>ひな</sup>、上保田<sup>かみやすだ</sup>、二反田<sup>にたんた</sup>、保田<sup>やすだ</sup>の 3 つの集落が存在している。地域内には江<sup>ごう</sup>の川<sup>かわ</sup>水系<sup>かん</sup>神野<sup>の</sup>瀬<sup>せ</sup>川<sup>がわ</sup>へ注ぐ茂田<sup>もだ</sup>川<sup>がわ</sup>が流れ、夏には蛍が舞い、トノサマガエルやオオサンショウウオも目撃されるなど生態系豊かな自然環境が存在する。

比較的なだらかな山麓に集落が広がっている典型的な中山間地域で、水稻、酒米を中心にもち麦、大豆、アスパラガス等の栽培を組み合わせた営農が行われている。地形的条件としては、農地の主傾斜は 1/19~1/7 (傾斜度 3° ~8°) で、土地利用率は耕地 7.4%、林野 31.0%となっている。

第 1 表 地区の概要

事項	内容	
地区の規模	1集落	
組織の性格	地縁的な集団等	
人口等	総人口	182人
	総世帯数	57戸
農業経営体数 (内訳)	農業経営体数	11経営体
	個人経営体数	8経営体
	団体経営体数	3経営体
	(内、法人経営体数)	3経営体
農用地の状況 (内訳)	総土地面積	762ha
	耕地面積	56ha
	田	54ha
	畑	2ha
	耕地率	7.3%
	一経営体当たり耕地面積	5.1ha

## 2. むらづくりの基本的特徴

### (1) むらづくりの動機、背景

#### ア 地域の団結

昭和 55 年、集落の賑わいづくりを掲げ若者による「石原こぶし会」が設立された。その後、厳しい社会情勢の中も活動を継続し、地域の団結のきっかけとなった。次の契機は持続的な地域資源保全に向けて取り組んだ平成 12 年度からの中山間地域等直接支払制度、平成 19 年度からの多面的機能支払交付金を活用した共同活動である。活動の先導役となっているボランティア集団や女性会（石原ひまわり会）を中心に、地域住民が主体となった、次世代に繋がる地域づくりが行われてきた。

#### イ 石原集落地域将来ビジョンの策定

集落の活力の衰退に歯止めをかけるために、次世代リーダーとして期待される男女 7 名の委員を中心に、令和 4 年度から農村 RMO 事業に取り組んでいる。まず、地域住民の理解を深めるため、アンケートや地域ごとの懇談会を開催した。集落ごとに抱える問題が異なり、顔なじみで集まる方が話しやすいことから、小集落で懇談会を行うよう工夫した。さらに集落内の小学生とワークショップを行い、大人目線だけでなく将来を担う子ども達の目を通した将来の石原集落について話を聞く良い機会となった。これら幅広い意見を集め、住民が一丸となれる「石原集落地域将来ビジョン」を作成した。

■スローガン：みんなでワッショイ！！住みよい石原

■戦略：すべての住民が地域作りの主役として共存共栄できる仕組みの構築で、次代に繋がる集落をめざします

■ビジョンのまとめ：

#### 1 暮らしづくり（生活・福祉・防災分野）

皆で支え合い、安全で安心して暮らせる石原をめざします

#### 2 ひとづくり（教育・子育て分野）

個性と得意が活かして、誰もが大切にされる石原をめざします

#### 3 しごとづくり（仕事・農業分野）

力を合わせて保全された里山で持続的な農業「ここだけ」が誇れる石原をめざします

#### 4 かんきょうづくり（環境・交流・定住分野）

豊かな自然と文化が魅力、開かれた帰りたくなる石原をめざします



写真 2 将来ビジョン表紙

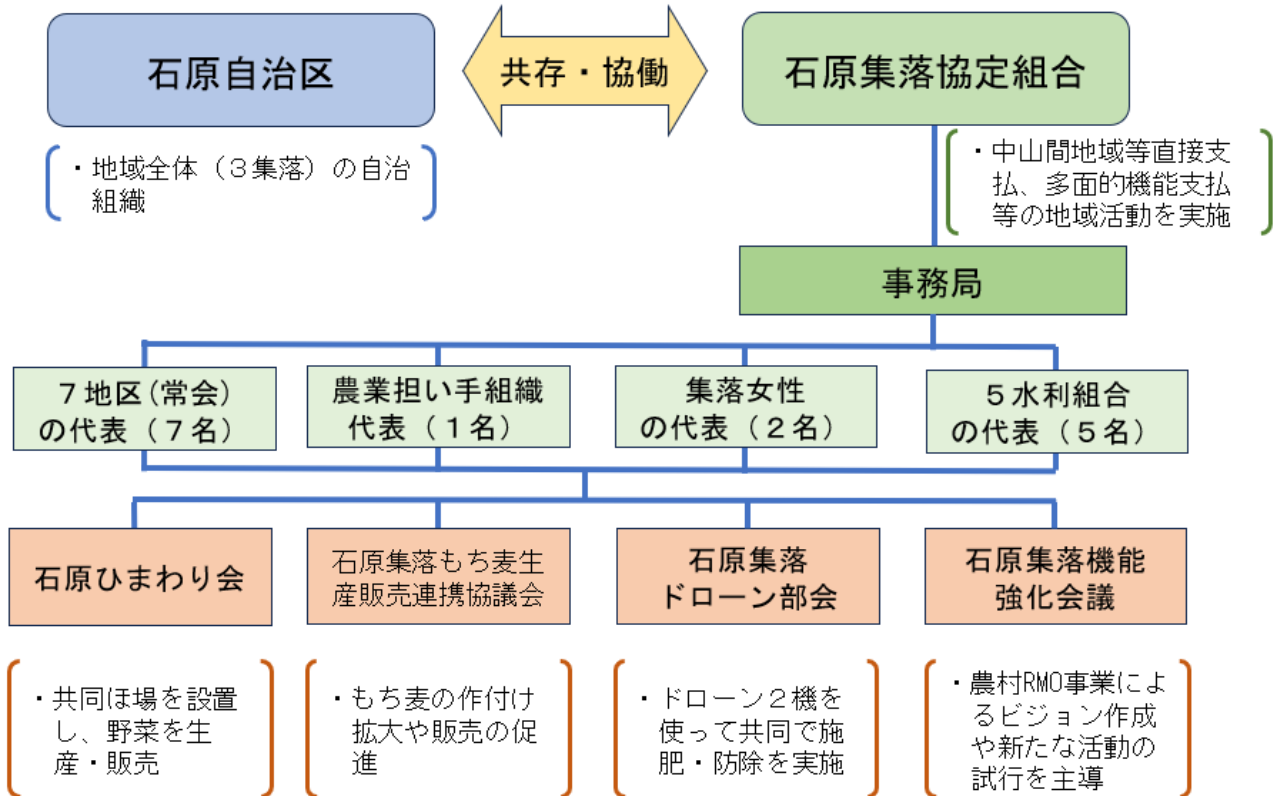
ビジョンには「住民みんなで力を合わせて、住みよい地域を作っていこう」という住民の思いが込められている。今後は、石原集落協定組合、石原自治区及び石原集落地域振興協議会が中心となり、各種団体組織と連携を図り、住民全体で協力して地域活動をビジョンに沿って戦略的に推進する。さらに、農用地・農業と人々の暮らしを守る仕組み構築のため、2階建て方式(※)導入も検討していく。

※2階建て方式：集落営農組織の体制の1つ。1階部分は農地の利用調整や草刈り、用水路掃除、生活支援など公益機能を担う。2階部分は農業経営や農地・施設管理を専門に行う。

## (2) むらづくりの推進体制

石原自治区には石原ひまわり会、石原集落ドローン部会、石原集落地域振興協議会(RMO)等のグループがあり、多方面に活動を展開している。グループは石原集落協定組合の組織に位置づけされ、共存協働しながら石原自治区の発展や活性化のために一翼を担っている。

第2図 むらづくり推進体制図



### ■ むらづくりの特色と優秀性

#### 1. むらづくりの性格

石原地域は持続的な地域資源保全に向け、中山間地域等直接支払制度や多面的機能支払交付金を活用した共同活動に取り組んでいる。活動の先導役となっているプロボラ（プロフェッショナルな方によるボランティア精神で地域を支える）人材や女性会（石原ひまわり会）を中心に、古くからある石原こぶし会が様々な活動を支え、地域住民が主体となり、住民を巻き込んだ次世代に繋がる地域づくりが行われてきた。

石原地域のむらづくりの特色は地域資源を活用した交流の促進である。子どもの農業体験、ひまわりまつり、ホテルの舞う里づくりを通して子どもの教育、地域への愛着形成を行い、かつそれらを新聞やHPで紹介することで「子育てのしやすい環境」をPRしている。その結果、学業や仕事、結婚のために一旦町を離れていた住民が家族と共にUターン、Iターンする事例が見られ、周辺の集落に比べて子供が多い特徴がある。

また、地域の基幹産業である農業を守るために農村協働力を活かした地域資源の保全体制の構築や地域労働力の活用も石原地域の特色である。昨今、農業は担い手の高齢化、労働力不足、資材高騰による所得の減少、鳥獣害等の問題により厳しい状況にあるが、農業を維持発展させることは集落環境保全、里山の再生につながる重要事項である。石原地

域では基盤整備やスマート農業、プロボラ人材を含む多様な人材の活用、補助金制度の新設、6次産業化などの多角的なアプローチによって集落の課題解決に挑んでいる。また、地域ぐるみの活動が増えることで住民同士のコミュニケーションが増え、Iターンなどで他所から来た人でも遠慮なく意見が言える雰囲気が形成されている。移住者の新たな視点が地域に新風をもたらし、住民の主体性、創造性を活かしたむらづくりが定着している。

この石原地域の「住民の我がこととしたむらづくりの取組み」を他の地域にも広げてほしい。現状と向き合い将来を悲観するのではなく、積極的に自ら行動することが石原地域のむらづくりの鍵である。

## 2. 農業生産面における特徴

### (1) 基盤整備を契機とした収益性の高い営農への転換

土地改良総合整備事業の区画整理により、用排水の分離による水管理の省力化、暗渠排水の機能向上、1枚当たりの面積の拡大等がもたらされた。その結果、農業法人や認定農業者等の担い手による効率的な農業の展開や、高収益作物や6次産業化につながる作物の栽培が可能となり、現在では担い手を中心に従来のもち麦、酒米に加え収益性の高いアスパラガス、もち麦の栽培と精麦もち麦の6次産業化を行っている。

### (2) 地域労働力の活用による収益力の向上

後継者不足により農業の衰退が危ぶまれる中、農事組合法人高幡は水稲、酒米、アスパラガス、もち麦、大豆の栽培に取り組んでいる。

人手を要するアスパラガスの収穫には、社会参加困難者、地区内女性、熟年退職者など地域の多様な人材へ就労機会を提供することで労働力を確保し、さらに地域住民の生きがいつくりの場を生み出している。



写真3 アスパラガス収穫を支える集落女性

### (3) 農産物の高付加価値化

水稲依存から脱却のため、平成30年度に地域内の農業法人を含む4者が「石原集落もち麦生産販売連携協議会」を設立。地域内外にもち麦の作付け面積拡大に取り組み、集落環境保全、里山再生に寄与している。現在約8haで生産し、今後は15haに拡大を予定している。



写真4 もち麦入りの餅、煎餅の商品開発

もち麦は食物繊維β-グルカンを含み、生活習慣病等の予防効果が高いスーパー食材として注目されている。平成30年には6次産業化法に基づく総合化事業計画の認定を受け、もち麦加工品の開発を行っている。もち麦入りの餅は道の駅、JA直売所等で定期的に販売されている。集落発信のブランド穀物として、広域的な販売促進とともに集落住民の日常の食卓消費の拡大に繋がっている。

#### (4) スマート農業の活用と農業女子の活躍

令和2年度には農業法人を含む4者がドローン部会を設立し、ドローンを共同導入した。作業効率化、生産性向上を推進するために、部会でスマート農業推進研修会を開催し、ドローンの利用拡大とオペレーター養成を図っている。オペレーターには農業法人役員の女性もおり、集落内外から依頼される農薬や肥料散布などドローン作業の需要に応える農業女子の活躍に注目が集まっている。

さらに、令和6年度には地域の企業がラジコン草刈り機を導入し、畦畔草刈り作業の負担軽減のため地域農業者への実演や貸出を開始した。



写真5 ドローンの操作講習会



写真6 農業女子オペレーター

#### (5) 中山間地域等直接支払制度交付金による地域活性化

中山間地域等直接支払交付金を元手に、令和3年度から3年間、地区内だけで流通する集落通貨券を発行した。諸事情により令和6年度は行わなかったが、地域活性化に繋がることから復活を望む声が多い。同年1月には小型ドローン操縦の講習料の半額助成、4月からは大型農機が公道を走る場合に必要となる大型特殊免許の取得費用の半額助成制度を設け、若手農業者が制度を活用している。交付金を活用し農業を続けやすい環境づくりや人材育成を地域ぐるみで行っている。

### 3. 生活・環境整備面における特徴

#### (1) 将来ビジョンの共有と情報発信

令和4年度から農村RMO事業に取り組み、住民の意見を基に石原集落地域将来ビジョンを作成した。住民全体で協力して事業を推進していくためには、ビジョンを地域全体で共有することが最も重要である。住民へ広報には「石原共同活動通信」を活用している。住民に向けての情報発信ツールとして平成20年3月に発行され、令和7年3月までに第68号を発行している。

#### (2) 地域における女性の活躍

地域女性により構成されている「石原ひまわり会」は“女性が動けば地域が変わる”をテーマに鳥獣害に強いモデルほ場を共同管理し、野菜の生産や出荷、加工品づくりを行っている。活動のシンボルロゴのシールを活用し、収穫物を直売所等で販売。楽しみながら農業技術を向上している。



写真7 石原ひまわり会による野菜販売

女性の参加機会を増やすことが集落活性化に不可欠であることから、今後も石原地域の魅力や活力の発信に繋がることが期待されている。

### (3) 地域資源を活用した交流の促進

#### ア 食育農業体験

J Aひろしま君田支店と協力して小学生と食育農業体験を行っている。ちゃぐりんキッズクラブは、子ども達が土に触れる機会もなくなる中で、農業体験を通じて食べ物の大切さや、農業に関わる感動と喜びを伝え、いのちの大切さや次代を担う人材育成を目的としている。石原地域でもサツマイモの苗植え、草取り、収穫後に焼き芋にして販売体験を行っている。

また、農事組合法人高幡はアスパラの販路を拡大するため市内外の住民にアスパラの収穫を体験してもらい、自ら収穫したアスパラを量り売りで販売している。このアスパラ収穫体験は、多くの親子連れで賑わっている。

#### イ ひまわりまつり

転作田の有効活用と多様な交流の拡大を目指し、近隣集落と協力して平成4年からひまわりの植栽を行っており、開花時期には「あったか村川とひまわりまつり」を開催している。毎年地域内外から多くの観光客が訪れ賑わう町の一大イベントである。近年、感染症対策から3年間中止となったが、ひまわりの播種は毎年継続し、令和5年からはまつりを再開した。



写真8 ひまわりまつりの様子

#### ウ ホタルの舞う里づくり

近年の豪雨の影響によりホタルの生息が減ったこともあり、令和4年にホタルの舞う里づくりを復活させるため、子ども達と一緒にホタルについての勉強会を開いた。その後、三次市の地域振興補助金の採択を受けて、ホタルの幼虫3千匹とホタルの餌であるカワナ6千匹を放流している。令和5年には放流が実を結び、川の水を優雅に彩る「光の競演」が蘇り、石原地域はホタル舞う里としての復活を果たした。

#### エ コミュニティスクール活動

君田小学校、農研機構、石原自治区、農業者、石原集落協定組合、三次市教育委員会が協力し、有機米の栽培・販売、水田の生物多様性の体験学習を小学生に対して行っている。体験ほ場はアイガモロボットによる草取りなどを行い、無農薬栽培をしている。

また、君田中学校の生徒が地域課題学習の一環で集落の集落産品のアスパラ、もち麦、霧里ポーク（豚肉）のキャラクター図案を令和6年度に作成した。霧里ポークは食パンの残渣を飼料としており、その特徴がわかる工夫が施されている。図案から石原在住のデザイナーがブラッシュアップし、可愛らしさと農村の温かさを感じさせるキャラクターへ完成させた。キャラクターシールを商品に貼り、販売促進や集落広報にも役立っている。



写真9 地域産品のキャラクター(アスパラ、もち麦、霧里ポーク)

#### (4) 農村共同力を活かした地域資源の保全管理体制の強化

高齢化や1軒当たりの管理面積の拡大が進む中、畦畔草刈りは管理者にとって大きな負担となっていた。そこで地区内の農業者が今後も安心して営農が行える環境を整備するために、平成23年度から畦畔草刈軽減のためセンチピード被覆に取り組んだ。被覆農地面積は概ね60%が完了し、現在も計画的に実施している。

深刻化している鳥獣被害防止には5年前から取り組み、集落を囲むように13kmのメッシュ柵と11基の箱罾を設置している。日常管理はICTカメラを併設し、プロボラ人材である地域の熟年者を中心に行い、休日には若い現役世代が合流し、きめ細かい巡視活動、餌管理に取り組んでいる。また、獣の侵入を防ぐ緩衝帯を整備するため、集落周辺の繁茂した竹林や雑草林を伐採している。伐採した竹は無煙炭化器で竹炭にし、肥料として畑に散布し有効利用している。

農業用施設については計画的な維持・補修作業の実施のため、平成23年度から農業用施設の長寿命化（旧向上対策）において、水路の補修、取水堰の修繕や農道舗装に取り組んでいる。重機を操える地元人材を活用した直営施工に加え、専門家の機能診断に基づく大規模な修繕は総会で工事箇所の承認を受けた上で業者に委託し実施している。



写真10 センチピード芝の播種作業



写真11 繁茂した竹林伐採